

写真で確認したが、その中には『四衆経 (Catuspariṣatsūtra)』の中程 (Waldschmidt ed., § 27a) から最後まで、さらにそれに連続して『大本経 (Mahāvadānasūtra)』のほぼ全文が含まれていることが判明した。つまりこれは両経を含む有部 (あるいは根本有部) 『長阿含』の第1章「六経品 (Ṣaṣṣūtrikanipāta)」の、まさにその箇所であった。『四衆経』と『大本経』のヴァルドシュミット校訂本中の欠落したり復元不全な箇所も、今後これを見ればすべて判明するはずである。

もしギルギットで『長阿含』の完全な写本が発見されたのだとすれば、全体で500葉以上はあったはずである。いくつか分割されて売り飛ばされたのであろうか。では残りは一体どこに。それらが近日中にマーケットに現れる可能性は高いように思われる。なお、数日前のアーロン氏からの連絡では写本は売れたとのことであったが、購入者は知らされていない。いずれにしても、これは現存する唯一の貴重文献である。仏教研究にとってその価値は計り知れない。購入者が誰であれ、現在の、さらに未来の購入者によってそれらが研究者に公開されることを願わずにはおれない。

付記

本稿は、3月25日のシンポジウムにおける発表のうち、スライドに先立つ口頭発表部分にその後の情報を一部追加してまとめたものである。なお筆者は、同内容の報告数編をすでに公にしているので参照していただきたい (『月刊しにか』1998年7月号、『東洋学術研究』38巻1号、『佛教大学総合研究所報』13, 15, 17号、『中外日報』2000年4月27日付)。

スコイエン・コレクションに対する本格的な研究は今始まったばかりであり、その全体を解読して写真とともに出版し、学界共有の財産とするには今後相当の時間と費用がかかるものと思われる。ノルウェー側では、本研究はノルウェー科学アカデミー高等研究所のプロジェクトとして採用されている。我が国から参加する筆者に「古典学の再構築」の公募研究の一つとして研究費をお認めいただいたことに御礼申し上げます。

(2000年4月30日)

タミル古典研究の回顧と展望

高橋 孝信

東京大学大学院人文社会系研究科教授

恋愛や英雄行為を主題とした南インド・タミル古典 (紀元後1～3世紀) は、北インドの宗教思想 (仏教、ジャイナ教、ヒンドゥー教) の流入、そしてヒンドゥー教が支配的になるにつれ、その世俗性ゆえに軽視から蔑視へ、さらに敵視されるにいたり、やがてすっかり忘れ去られてしまう。一方、16世紀以降、西洋宣教師たちによって印刷術がもたらされ、教育も普及するようになる。さらに西洋の文物に接したインド知識人たちは己の文化やその起源について考えるようになっていた。こうした中で、まず18世紀末からドラヴィダ諸語の発見が始まり、タミル語がアーリヤ系の言語とは異なることが立証された。ついで19世紀末から忘れられていた古典が「再発見」され、それに描かれたタミル古代の文化は彼らが長い間親しんでいたヒンドゥー文化とはまるで異質の高度な文化であることを発見する。当時はまたイギリス統治下であって、全人口のわずか3パーセントほどに過ぎないバラモン (ヒンドゥー文化の代表者) が、政治や教育などの分野で主要ポストの約8割を独占し、彼らに対する反感が強まっていた。

こうした中で、古典の「再発見」はタミルナショナリズムを生むことになった。タミルナショナリズムは、一方で古典研究への熱意を生み出し、そのため今世紀30年代頃までの研究の中には今日でもなお価値を失わない良質なものが存在する。しかし、他方ではいたずらに過去を賛美するのみで、批判的合理的な研究とは呼び得ない学問傾向を生んだのも確かである。そして、このような流れから反バラモン、反サンスクリット運動が沸き起り今日に至っている。

一方、西洋のインド研究はそもそも植民地支配と密接に結びついていた。そのため、初期のインド研究は主に宣教師たちによって南インド (ことにタミル) の言語や文化に向けられていたが、やがてインド文化の基盤をなすヒンドゥー文化およびその中心的な役割を果たしている言語であるサンスクリット語の研究に移行して行く。インド独立後もこの傾向は変わらないが、植民地経営の要請としてのインド学でもあったから、欧州でのインド研究は80年代ごろから急速に縮小されている。

またこの間、学問の潮流は文献学から言語学・人類学

などへ移ってゆく。この傾向は数年遅れてインドにも伝播するが、インドで特徴的なのは、この傾向とともに伝統的教育制度、すなわち師資相承のバンディット制による教育を受けた研究者が減少することである。言いかえると、抜群の読みを誇れる研究者が減少しているのである。

さらにインドでは、経済の発展と学問の大衆化（インドでも大学数の増加によって学生数が増加しているが、特徴的なのはそれらの学生のかなりの数が通信教育課程に属しているということにある）のために、商業出版が主流となり、良質のテキスト、なかんずく古典テキストが出版されなくなっている。

このように、タミル古典研究の現状は決して明るいものではない。しかし反面、タミル州のいくつかの出版社ではかつての良質なテキストの復刻版を出し始めているし、欧米でも良質の研究や翻訳が出されており、展望が開けていないわけではない。筆者もこの分野の一研究者として、タミル学を担ってゆくつもりである。

藤原定家の日記筆録形態

尾上 陽介

東京大学史料編纂所助手

藤原定家は鎌倉前期という時代の転換期を生きた貴族で、勅撰和歌集の撰者を勤めるなど、歌壇の大御所としても活躍し、また数多くの典籍を書写し後世に伝えるなど、文化史上にも多大な足跡を残した。そのため、その日記『明月記』は、中世史学・中世文学の根本史料として大変貴重なものである。

この『明月記』は、定家の没後、ほとんどの部分が子孫である冷泉家に永らく伝来した。定家の嫡男為家の譲状によれば、昇殿を許され、朝廷に出仕し始めた治承年間から、亡くなる直前の仁治年間まで、本来は日記が存在したようであるが、一部は散逸し、一部は古筆鑑賞のために細かく切断され巷間に流出した。しかし、幸いなことに、依然としてかなりの分量の原本が現存し、近年には、冷泉家伝来の原本が写真版で出版されるようになり、従来困難であった史料学的研究が可能になってきている。

原本の残る中世の日記史料では、一般的に言って、記

主（日記の筆者）が意識していなくても、料紙や表記の様式が徐々に一定化するものと、逆に時期ごとにグループ分けできるものがある。『明月記』について、写真等により確認できる限り（一部は写本による推定を含む）後述のような料紙や表記の特徴を調べると、一貫した筆録形態になるものではなく、明瞭に時期ごとに変化することが判明する。

1 料紙の分類

まず、料紙から分類してみると、すでに山本信吉氏の指摘（「藤原定家の筆跡について」『國華』一二三九、99年）があるように、『明月記』原本の料紙は、A界線有・紙背無、B界線有・紙背有、C界線無・紙背有、そしてD界線無・紙背無の四種類からなり、大部分はA・B・Cが占める。A・Bには基本的に天二本・地一本の界線が引かれ、Aは白紙に、Bは文書の反故を再利用して書かれている。このAとBは比較的整然と文字が書かれており、清書されたものであることは間違いないと考えられ、紙背文書の年次から、Bは日記を書いた後、ほぼ半年以内に清書されていることが、高橋典幸氏（『明月記』嘉禄三年春記紙背の研究、『明月記研究』二、97年）や山本氏により指摘されている。一方、界線のないCは明らかに推敲の痕跡が甚だしく、清書前の状態のままであると判断できる。

以上のことから、定家はまず書状の反故の裏側に日記を書き、これを清書する際には、新たに白紙が書状の反故を用意し、それに界線を引いて書く、という様式であったことがわかる。

次に、時期による料紙の変化について、原本であることが疑われるものを除外して調べると、およそ次の5グループに分かれていることが指摘できる。まずは①治承四・五年記から建久六年記までで、史料的制約があるが、この時期はAが主であると判断でき、②建久七年記から建仁二年記までは、ほとんどすべてがCである。③建仁三年記から承元二年記以後までは（承元三・四年記が現存せず、区切りの年が明確でないため、敢えて「以後まで」としておく）、ほぼAで、④建暦元年記以前から建保元年記以後まではC、最後の⑤嘉禄元年記以前から天福元年記以後まではBと分けることができる。

2 表記の分類

日記史料は、その性格上、ほぼ毎日共通して書かれるべき項目がある。ここではそのような項目として、記事の内容を「何々の事」といった形式で要約して記事の行